震災エッセイ㉓ ―被災した神戸だから伝えられること

記銘碑

大谷　成章（フリーライター）

剪画／とみさわ かよの

沖縄の摩文仁の平和の礎（いしじ）に行った。県立平和祈念公園の太平洋を見渡す岡の上に、屏風の形をした黒い花崗岩の碑が建てられている。平和の灯を囲んで半円形に並ぶその数は１１９基。

碑には24万３８３人の名前が刻まれている。「十五年戦争」の間に沖縄の地で亡くなった人たちだ。沖縄県出身者１４万９０３５人。県外の人たち７万６７９６人。うち兵庫県出身者は３１９６人。北海道、東京都、福岡県に次いで多い。

朝鮮半島から連れてこられた人たち４２６人の名前もある。沖縄戦で戦死した米国人１万４００８人の名前もある。敵味方の区別をせず、戦争の犠牲者を等しく刻銘している。

碑は、阪神・淡路大震災発生の年の６月23日に除幕された。50年前のその日、沖縄戦が終結したとされる「慰霊の日」だ。

膨大な死者の名前に囲まれて岡を歩いた。冬でも沖縄の芝はあおい。黒い石碑の間を、太平洋の波音が風に乗って通っていく。

死者たちは無言だが、足元から何かを語りかけようとする力が伝わってくる。いまここにいる私は、死者たちによって生かされている、という思いが胸の中に広がった。

死者の名を記録することの意味を考えた。お寺には過去帳があり、広島・長崎には原爆犠牲者の名を書いた帳簿が慰霊碑に納められている。阪神・淡路大震災の犠牲者は「慰霊と復興のモニュメント」の地下の銘板に刻まれている。

これらは通常、外の空気にふれることがない。

平和の礎は、日の光にさらされ、雨に洗われ、風で磨かれている。死者として葬られているのではない。死を語り継ぐために、この地に立ち現れているのだと思った。

フランスの田舎では村や町の入り口に第一次大戦からの戦死者の名が刻まれた碑が建っていた。死者の存在を身近に感じることによって、いま生きていることの大切さを確認できるのではないだろうか。

沖縄で学んだことは多い。感服したのは、空港や観光バスの待合所で沖縄の歴史の教科書が売られていることだ。

沖縄歴史教育研究会の新城俊昭編『高等学校琉球・沖縄史』（1500円）を買った。沖縄戦の章は金城正篤琉球大学名誉教授、戦後の章は新崎盛暉沖縄大学学長が監修している。

縄文人は沖縄から北上し、東北地方に縄文文化を広めたことから、安室奈美恵、Ｃｏｃｃｏなど沖縄の若者の活躍ぶりまで記している。

沖縄では先の戦争を太平洋戦争とは呼ばない。1931年に起こった満州事変が、日中戦争、アジア太平洋戦争に発展したととらえて「十五年戦争」と呼んでいる。

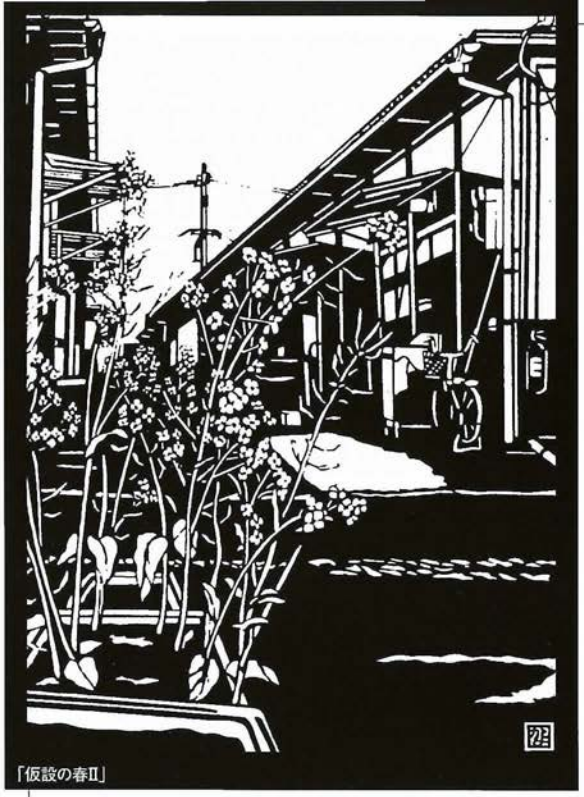
沖縄は武力紛争のない平和な島だったこと、明治以降も、沖縄の軍備は「連帯司令官の軍馬1頭だけ」と言われるほど無防備な島だったことも、バスの中でこの教科書を読んで知った。

平和の礎については、「十五年戦争」は国家の責任でおこなわれた戦争だから国がおこなうべき事業だった、と指摘している。

平和の島は、いまアジア・太平洋で最大の軍事基地になっている。高速道路を走っていると「流れ弾に注意」という表示がある。どう注意すればいいのか。

阪神・淡路大震災の体験と教訓を伝える書籍は数多く出版されている。私も数冊の執筆、編集にかかわったが、『高等学校琉球・沖縄史』には及ぶものは数少ないと思う。

なにより、空港やバスの待合所で売られているのがすごい。阪神・淡路大震災についても、すぐれた副読本が生まれ、空港や駅で扱うようにならないだろうか。



「仮設の春Ⅱ」

■大谷　成章（おおたに・しげあき）1939年但馬生まれ。元神戸新聞記者。震災当時は月刊神戸っ子編集者。その後、フリーライター。「阪神・淡路大震災10年」（共著、岩波新書）など。

続帰らぬ人形

出石 アカル
絵・菅原洸人
題字・六車明峰

いつも笑顔しか見せないので、苦労知らずの人とばかり思っていた明石陽子さん80歳の、実は哀切極まりない昔話の続き。

だが、その前に、この陽子さんの父親、映画脚本家、石川白鳥についてネット検索した結果を。

映画のタイトルがズラリと出て来た。ヒットしたという「帰らぬ人形」は、1923年4月、松竹映画で石川白鳥原作・脚本、大久保忠素監督、長井信一撮影。出演は、諸口一九、英百合子、柳さく子、岡島艶子などとなっている。松竹での作品は、1923年3月から24年10月までに集中しており、その間に19本が製作されている。ほぼ月に一本のペースで、多い月には3本というのもある。売れっ子作家と言っていい。

その映画のフィルムだが、どうやら残ってはいないらしい。1950年にフィルム倉庫が大火災に見舞われていて死者まで出ている。

また別に、1924年秋に、俳優多数が大久保監督らと共に松竹を脱退している。そして白鳥もどうやらこの不穏な動きに同調したらしい。それを裏付けるように、その後、松竹作品はなく、1925年から26年にかけて、日活で9本製作されている。そして5年の間隔があって31年の寛プロでの「柳生十兵衛」が最後の作品となっていて、あとはぷっつりとない。何か複雑な事情があるようだが、今や探るあてはない。

陽子さんは1926年生まれである。そのころの一家の生活は、恐らく困窮していたであろう。

陽子さんの話にもどす。

「昭和19年（1944年）、わたしが18歳の時、父が死んだと鎌倉から知らせがあってね。母は、行かなくていいと反対したけど、わたし、電報の住所を頼りに探して行ったんよ。やっとたどり着いたら、葬式は済んでしまってたんやけど、父と暮らしてたという優しそうな女の人がいてはって、よく来られましたと家の中へ入れてくれはって、仏壇の遺骨にお参りさせてもらった。そこで、『あの人は、いつも陽子陽子とあなたのことを心配してましたよ』と聞かされたんよ。そして、遺骨を持たせてくれはって、あの人がよく行ってた場所を案内しましょ、と言ってくれはって、縁のあるとこ連れて歩いてくれはったんよ。わたし、父の

遺骨を抱いて町を歩き回ったんよ。いつも行った散髪屋さんやら、煙草屋やら、食堂やら、映画館やらを案内してもらって、そこでの様子を話してもろたりして。2月の寒い日やった。それから江の島の海へも行った。きれかった。だけどわたし、腹立たしィて悔しィて、何でわたしを十年もほっといたんよ、て骨に向かって言った。何で呼んでくれへんかったんよ、て言った。約束したやないの、て言ったんよ」

陽子さんの問わず語りを聞きながら、わたしは、冬の海を前に立ち尽くす少女、胸に父の骨を抱いて、こけし人形のように立ち尽くし、涙で頬を濡らす少女の姿を思い浮かべていた。

「涙流してるわたしを見て、その人が『お父さんね、〝誰か故郷を思わざる〟って歌が好きでね、いつも口ずさんでおられましたよ』て。ずっと貧乏やったから、呼びたくても呼べなくて、会いにも行けなくて、ということやったらしい。それからこんなことも言ってはった。『あの人、小説書いても、甘い恋愛ものしか書けなかったので、売れなかった』と。そら戦争中やもんね。『だけど、お金を貯めて陽子を迎えに行くと言って、新聞配達やらいろんな仕事して』と」

二晩そこに泊めてもらって、お父さんの話いっぱいしてもらって帰ったのだと。遺骨をもらって、写真も一枚もらって帰ったのだと。

「家に帰ったら、母がびっくりしてね、そんな骨、どないすんのん、て怒ったんよ。それでわたし、知恩院さんに頼んで、そこに納めさせてもろた。写真は、わたしのお守りにして大事にしてたんやけどね、桑名の挺身隊の寮にいた時、急な空襲で荷物持ち出す間がなくて、焼いてしまったんよ。わたし、炎に向かって『シャシンーッ！』て叫んでた。写真はなくなったけど、わたしは、その写真の顔と等持院で別れた時の姿とは、頭の中にハッキリ残ってるから」

つらい話だった。そして最後に、

「この前、老人会で旅行に行ってね、江の島へも行ったんよ。60何年ぶりかで。わたし、人から離れて、一人で海眺めてた。昔の話はだれにもしなかった。だけどねお兄ちゃん、今は幸せ。こうして元気で好きなことして暮らさせてもろて、ボランティアで人の世話までさせてもろて、ありがたいなあと思てますねん」

それにしても、「帰らぬ人形」は、どんな映画だったのだろうか。

■出石アカル（いずし・あかる）一九四三年兵庫県生まれ。「風媒花」「火曜日」同人。兵庫県現代詩協会会員。詩集「コーヒーカップの耳」（編集工房ノア刊）にて、二〇〇二年度第三十一回ブルーメール賞文学部門受賞。

《神戸異人館物語》

夜明けのハンター

三条杜夫
絵・谷口和市

ハンター肖像

大阪ドリーム

平野常助商店のある大阪江之子島上之町から西南に一里余りほど歩いたところに、天保山があった。そこは、明治元年の今からさかのぼること四十五年、天保三年に鴻池善右衛門や加島屋久右衛門ら豪商が中心となって資金を集め、安治川と木津川の大川さらえを行った土砂を盛り上げて築いた土地であった。八幡屋新田にうず高く積み上げられた土砂が山となって、船の目印になることから、目印山とも呼ばれるようになっていた。幕末の安政元年、つまり十四年前にこの沖にロシアの軍艦・ジアナ号が時の太平洋艦隊司令官プチャーチンを使節として姿を現し、あたりを騒然とさせたこともある。その小高い丘の麓から大阪と各地を結ぶ船が出ていた。ハンターはこの船を利用して兵庫と大阪を行き来していた。

ある日、走人塾の米田左門講師にハンターは言った。

「一度、大阪へゴ同行願イタイデス・・・」

米田はすぐにぴんときた。日本びいきのハンターだから、大阪の風土について勉強したいのだろ

う。しかし、それ以上に平野愛子の住む土地だから、そこに愛着を覚えているのに違いないと、米田は学者らしい見解で、ハンターの心境まで読み取る。

「OKですよ。ミスター・ハンター。ちょうど私も一度大阪へ行ってみたいと思っていたところですから、喜んで同行させて下さい」

米田は教育にたずさわる身として、北浜の適塾を訪ねてみたいとかねてより思っていた。

「二、三日大阪ノ自由亭ニ泊マリ込ム気持チデオ願イシマス」

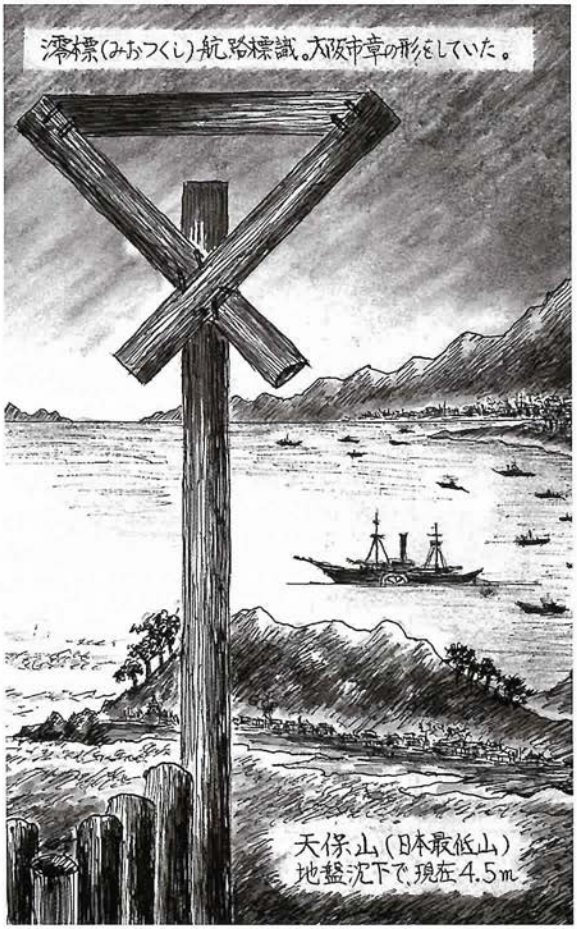
川口居留地予定地のそばに誕生して間もない外国人相手の西洋料理店兼宿泊所「自由亭」にハンターは米田を案内し、そこを拠点に米田の意のままに行動させた。

「自由亭」の主人・草野丈吉にハンターが牛肉を勧めてからというもの、ステーキがオリジナルメニューとして人気を集めていた。「キルビー商会」が納入した牛肉を料理人が焼き上げたステーキを食べながら、米田がハンターに報告する。

「この大阪が天下の台所として繁栄したのは水運に恵まれて、諸国の物産の集散地となったからです。しかし、まさか、ハンターさんがこんなおいしいステーキを日本人に教えて下さるとは思いもかけなかったですね。感謝しますよ」

米田はごきげんになって、ついつい、饒舌になる。が、それはハンターにとって何よりもの知識吸収の機会ともなるので、にこやかに耳を傾ける。

安治川を少しさかのぼると中之島があり、北側を堂島側、南側を土佐堀側が流れる。そのあたり一帯に百間四方、約一万坪の広大な敷地を誇った淀屋の屋敷跡があった。



「ハンターさん、立身出世の人物がこの地におりましてね、秀吉の時代に山城の国から大坂に出て来て、材木商から身を起こし、大坂落城の時に鎧、兜、刀剣などを処理する特権を与えられて大金持ちになったんです」
「大金持チ？　リッチマン？　日本ノビジネスノサクセス・ストーリーデスネ？」
　淀屋の初代・与三郎常安は土地の開発にも力を注ぎ、常安請地として開発したのが中之島であった。二代目・言当の時代に靭の地に魚市場を開設するほか、蔵元として諸大名の米の売りさばきも行い、堂島米市場へと発展させる。寛永年間に自費で架けた木の淀屋橋がのちのちまでその名をとどめることとなる。
「ハンターさん、サクセスストーリーには時として思いがけない展開があるもので、それが人生のおもしろさだと私は思うのですよ」
「淀屋ストーリーニモ意外ナ展開アリマスカ？」
　ハンターがナイフで切りかけたステーキをストップさせて興味深げに聞く。
「最盛期には幕府や大名への貸し金が一億両とも二十億両とも言われるほど羽振りの良い淀屋でしたが、五代目・通称辰五郎の時に破滅します」
「破滅？　何カ理由アリマスカ？　知リタイデス」
「単純です。辰五郎のぜいたくが町人の身分をわきまえぬとして、幕府に全財産を没収されたんです」
「幕府ニ貸シ金ノ協力マデシタ者ヲ幕府ガ痛メツケル？　私ニハ理解デキマセン」
「ハンターさんはお人がいいので、理解に苦しまれるでしょうが、権力者のすることは時に非情です」
「フーン、日本モ恐ロシイ国デスネ？」
「この事実を欠所事件と呼びましたが、当時の人々の話題を集めましてね、近松作『淀鯉出世滝徳』として竹本座で上演されました」
「近松？　近松門左衛門？　日本ノシェークスピアネ？」
「さすがはハンターさん、近松をご存知なのですね？」
「イエス、竹本座ノアッタ場所ヲイツカ見タイト思ッテイマス」
「私は逆にシェークスピアに興味があります。日本の近松が題材にした淀屋は西国から九州にかけての諸大名の多くに金を貸し、淀屋に借金のない者はないというほどになりました。大名を経済的に支配するまでになった淀屋を幕府が恐れ、出る杭を叩いたというのが真相です。ハンターさん、日本には『出る杭は打たれる』という諺がありますから、注意して下さいね」
「私、平野商店ノ娘サン、看病シマシタ、アレ、ヤリ過ギデシタカネ？」
　何日も通い続けて平野常助の長女・愛子に自分が調合した西洋の薬を呑ませて看病をしたことが行き過ぎだったかと、ふとハンターは今にして思ったのである。
「いいえ、とんでもない、ハンターさん、あなたが愛子さんの命を救ったことはとても立派です。

良いことは自信を持ってやり抜くことです。この国は天下を取った者にへつらう習性もありますから、どうせならビジネスのサクセスを目指してがんばるのみですよ」
「イズレ、大キナビジネスシタイト思ッテ私、アイルランド出テ来マシタ」
「ハンターさんならきっとそのうちに大きなビジネスやられると私は見ています。そのための助走の日々が今ですよ」
　ステーキを食べ終えて、米田はナイフとフォークをテーブルに置くと、ハンターの目を見てほほえんだ。
「ハンターさん、会わせて下さい。愛子さんに」
「ミスター米田、会ッテクレマスカ？ミス愛子ニ」
「もちろんですよ。だから、お供して大阪に来たんですよ」

　「自由亭」のベッドは懐かしい故国を思い出させる。アイルランドで過ごした幼い日々がハンターの脳裏によみがえる。しかし、米田にとっては、畳の上に敷くふとんとは全く勝手の異なることで、なかなか眠りにつけない。ようやくにして眠りに落ちたと思ったら、窓の外に朝日がさしかかってきた。
　平野商店は「自由亭」から少しの道のりである。玄関先でハンターが声をかけると、すぐに手代が
「あ、ハンターさん、ようお越し」
　と心から嬉しそうな態度で迎えてくれる。愛子嬢の命の恩人としてハンターを見てくれていることが、その態度から読み取れる。
「ハンターさん、その節はほんまにおおきにでした」
　主人常助が何を置いても顔を出す。
「さあさあ、上がっとくれやす」
「ア、ゴ主人、私ガオ世話ニナッテイル先生、オ連レシマシタ」
「兵庫で走人塾の講師をしております米田左門と申します」
「この店のあるじの平野常助です。よう来てくれはりました。ささ、ご一緒に座敷へ上がっとくんなはれ」
　二人が座敷に通されて間もなく、母菊子と一緒に愛子が姿を見せた。
「ハンターさん、このたびは命をお助けいただきまして、本当にありがとうございました」
　十八歳の娘ながら、しっかりとお礼を言う。娘と共に、畳に額をすりつけんばかりにお辞儀をする母がまた感じよい婦人である。
「ハンターさんよりご当家のことは伺っておりました。お初にお目にかかれ光栄です」
　きっちりと挨拶を返す米田もさすがである。
「アレカラ、体ノ具合ハイイデスカ？」
「はい、ハンターさんのお薬が私の体の灰汁（あく）抜けをして下さったようで、とても調子が良くなりました」
「ソレハイイ。マタ、具合ガ悪クナッタライツデモスグニ、私ニ言ッテ下サイヨ」
「はい。そうします」

愛子はきわめて素直である。
「でも、どうやってハンターさんに連絡すればいいのでしょう？」
愛子は真剣に困りはてた顔をする。この時代は電話はもちろん、郵便もない。連絡を取る方法をどのようにすればいいのかと、愛子は娘ごころに案じたのである。米田が名案を思いついた。
「そうだ、これからハンターさんが定期的にこのお家を訪ねるようにすればいいのですよ」
「いいのですか？」
愛子が目を輝かせた。
「ハンターさん、大阪にいらっしゃる用事、たくさんあります？」
不安な面持ちも隠せない愛子を、かわいいとハンターは思った。
「OKデスヨ。ビジネス作ッテデモ、私、大阪ニ来マス」
「うわあ、嬉しい！　サンキューベリーマッチ」
「これで決まりです。ハンターさん、なるべくこれからは大阪のビジネスを作って、定期的にこの平野家を訪問して下さい」
米田が講師然としてハンターに言うのを、常助、菊子夫婦は目を細めながら見守っている。
「米田先生、よろしければ、今宵、うちでお食事会をいかがでしょうか？　もちろん、ハンターさんを囲んでのことですが」
菊子の突然の提案に、米田はどう返答したものか、ハンターの顔を見る。にこやかなハンターの表情が答えを示唆している。
「ありがとうございます。喜んで今宵、お食事をご馳走になりましょう」
夕刻までの間に、米田は行ってきたい所があった。適塾だった。ハンターも同行することにした。知識欲旺盛な米田が興味を示す場所はハンターにとっても意義のある場所に違いない。
土佐堀川に沿って東へ歩くこと、半里余り。北浜に適塾の建物があった。白壁造り、二階建ての適塾がそのままの姿をとどめていた。
「緒方洪庵という医学に明るい人物が天保十四年から文久二年まで、ここで蘭学を教えたんです」
米田は話しに聞いていた適塾を実際に目にして、興奮を隠しきれない面持ちでハンターに説明する。
「今から六年前に、幕府の要請で洪庵が奥医師として江戸城に招かれるまで、ここで優秀な人材を育てていたんです」
米田の説明通り、およそ二十五年間にここで学んだ者は述べ千人におよんだ。蘭学が連日講義され、若き学徒が切磋琢磨して自己の向上に努めた。大村益二郎、橋本左内、大鳥圭介など維新の改革を担った人材を輩出したのもこの適塾である。
「最近、江戸に慶應義塾を起こした福沢諭吉もここからスタートしたんです」
大坂生まれの諭吉は洪庵を慕って入塾、勉学に励むうちに腸チフスをわずらい、父の故郷、大分に移り住む。しかし、向学心に燃えて再び、安政三年（1856年）大坂に戻り、その翌年には塾長となった。一年後、独立を志して江戸へ出て、

蘭学塾「一小家塾」を起こす。十年後の慶應四年、慶應義塾と改称し、それがのちに慶應義塾大学となって後世にまで存続する。

「天ハ人ノ上ニ人ヲ作ラズ、人ノ下ニ人ヲ作ラズト名言ヲ吐イタ人デスネ？　福沢諭吉サンノ原点ハココデスカ」

感慨にふけるハンターである。

「安政元年に二十歳で大分に行き、そこから長崎に出て、再び大坂に戻り、二十四歳の時に江戸へ出て、慶應義塾と改めた時は三十四歳の諭吉でした。彼に比べれば、私なんか兵庫の片隅に埋もれたままの男。ま、無理に立身出世は望みませんが、ハンターさんはなんとしても出世して下さいよ。そのための協力は喜んでしますからね」

米田は本心でハンターに色々な情報を提供したり、知識を授けたりするのであった。

「日本ノ立身出世ガドンナモノカワカリマセンガ、私ハ目標ニ向カッテソノ時、ソノ時ヲ一生懸命ニ行動スルヨウ自分ヲ戒メテイマス」

「立派です。ＯＫです。ミスター・ハンター」

ロシアの軍艦が天保山に訪れた時、通訳を買って出たのがこの適塾の塾生であったことも米田はハンターに教えた。

「この適塾に杉田玄白の『解体新書』やオランダ辞書の『ヅーフ・ハルマ』があって塾生がうばい合って勉強したそうです。塾の講師たるもの、一度はここを訪ねてみたいと思ってましたが、いやあ、ハンターさんのお陰で夢が叶いました」

「ドクター米田、その夢はスモールデス。もっとビッグナ夢ヲ一緒ニ見マショウ」

「もっとビッグな夢、ですか？　ハンターさんの大阪ドリームですか？」

米田は単にハンターの言葉を受けて、大阪ドリームと表現したまでだったが、大阪ドリームはのちに現実のものとなる。ハンターは、命を助けた薬問屋の娘・愛子と共に、近代日本の歴史に残るほどの大きな夢の花を咲かせるのである。しかし、当の本人自身がその運命に気付いていない。人の一生とはなるほど計り知れず、また興味深い。

つづく

■三条杜夫（さんじょう・もりお）
フリーアナウンサー、放送作家。ルポライターを経て、放送業界へ。経験にもとづく地域活性化講師としての活動も評価されている。著書に「いのち結んで」「宝の道七福神めぐり」「そうゆう人たち」など。

海軍兵学校で終戦を迎えた田﨑俊作は
郷里に戻り、長崎経済専門学校
（現在の長崎大学）に入学
将来は真珠商になることを決意した田﨑は、
卒業後神戸にある鄭旺真珠有限公司に就職した
海からの贈り物・真珠とともに生きる
日本の真珠王
～King of Pearl～ Syunsaku Tasaki Story
田﨑俊作物語〈第三話〉
漫画：佐藤晴美

鄭旺真珠有限公司の
社長・鄭旺は
台湾出身の真珠商である
戦後の真珠業界の流通分野で
名を馳せた人物であった

田﨑と鄭との関わりは俊作がまだ子どもの頃に遡る
俊作の父・甚作が神戸の高島真珠で働いていた時に
出会ったのが当時まだ駆け出しの鄭だった

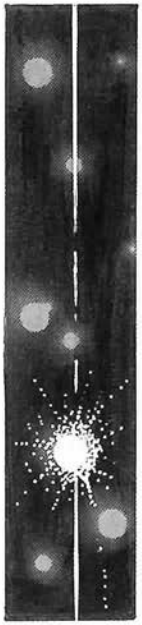
真珠を売って下さい！
もう三度も来てますね…これだけ熱心な人ですから一度取り引きしてみてはどうですか
売って下さい
・・・
そうだな…
・・・・
ゴリ
おぉっ
！
こちらで…
スッ
ピシッ
若いのに見どころがある！きっと成功する男だ
父が長崎県大村に戻り真珠の養殖業を始めてからも鄭旺氏とのつきあいは続いていた―
俊作、真珠の商売の修行に出たいなら鄭旺さんのもとに行きなさい
・・・・
ブロォォ…

ブロロロ
高島社長が見抜いた通り
鄭旺は真珠商として
大成功しており、
大層羽振りが良かった
日本人が車すら持っていない
時代に外国車を乗り回していた
ブロオオオオ
俊作はそんな鄭旺のもとで
住み込みで働くことになった
鄭旺真珠では
鄭旺氏の弟・鄭水木氏が
加工関係の中心となっていた
浜揚げ珠の
選別ができました

まちがっている
じゃないか
やり直せ！
ジャラ
・・・・
真珠の大きさ
良し悪しを見抜く
「選別」の上手・下手は
真珠商売の命である

・・・
まだ
まちがってる
だめ
だめだ
だめッ
水木さん…
どんなふうに
選別すれば
良いのですか?
それは田崎
口で言っても
わからないことだ

口で言っても
わからないこと・・・



真珠
360度の照り
美しさ
キズ
それらを
総合的に瞬時に
判断することだ

・・・
田﨑は寸暇を
惜しんで選別の
腕を磨いた

真珠の選別は
手でするものではない
目と心でするものだ
毎日欠かさず
選別作業を続けるうち
田﨑はそう語るようになった

・・・
・・・
—この珠だと90万円というところですな
なんとか100万円で買っていただけませんか
ペコ

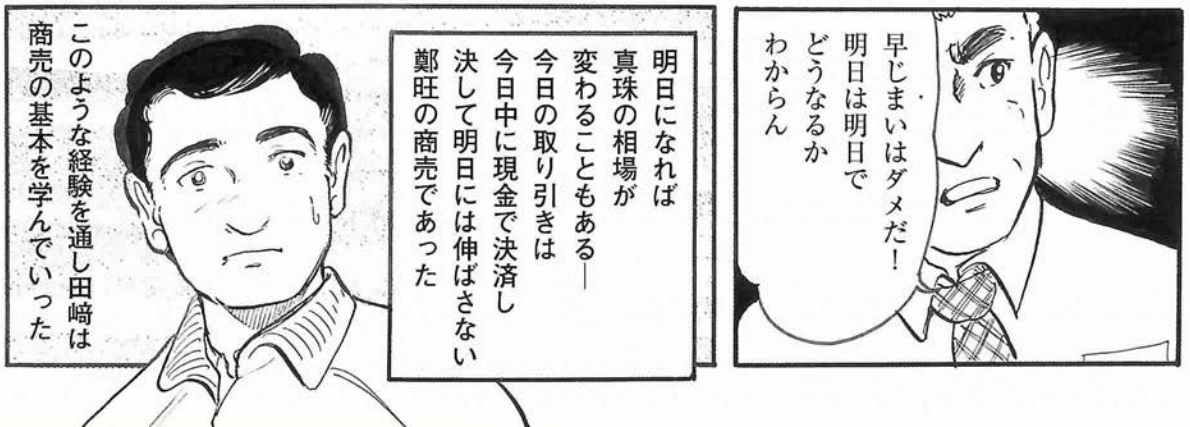
この次はもっと良い商品で埋め合わせを
商売にこの次はない！
お金が足りないなら貸しても良いが真珠の値段は値段だ

あ、田崎さんあなたからも何か口添えしていただけませんか

鄭さん、持って来ました
ペコ
おお

こちらが代金ですありがとうございました
ペコ
おおありがとうございました
その代わり養殖業者への支払いはすべて現金で銀行の支店長にお金を持って来させ、手が切れるような新札で支払っていた

またこんなこともあった
ありがとうございました
今日はよく売れましたね今日は終わりにしますか


早じまいはダメだ！明日は明日でどうなるかわからん
明日になれば真珠の相場が変わることもある—今日の取り引きは今日中に現金で決済し決して明日には伸ばさない鄭旺の商売であった
このような経験を通し田﨑は商売の基本を学んでいった

あの…
お久しぶりです 大村からの 道のりは長かった でしょう
…で… どうでしょう 300万くらいで売れれば ありがたいのですが
これは絶対 350万円で 売れます 真珠商も紹介 しますよ
田崎は徐々に 真珠選別の腕をあげ 真珠商からの信頼も 得るようになっていった
田崎さんの選別なら その値段で買いましょう
田崎さんの 言う通りの 値段で 売れました
これ わずかですが お礼です
え? あ…

独立…
田﨑の頭には
いつしか「独立」の
文字が浮かんでいた
よし
この金を
独立のための
事業資金として
蓄えていこう
作業をしながら
鄭旺、鄭水木兄弟がする
商売の話し合いを聞き
真珠の評価や商売法を
必死で吸収した
将来自分の手で海外に
真珠を売るために
英語を話すことが
必要だと、英会話学校にも
通い始めた

田﨑は独立以外に
もう一つ父親に
報告することがあった
――か、それらは
田﨑が思うように簡単には
進まなかった

つづく